

効果的な対策周知と劇場内の安全性周知が急務

吉村道彦（公共施設管理者／アマオケ団体所属）

まず始めに、ホール・劇場を初めとする公共施設運営の正常化に向けて、日々ご尽力されておられる皆様に、深く感謝申し上げます。世の中に公開されている関連情報につきましては、私達が既知の情報を含む殆どの情報を網羅されていることとお察ししますが、その前提において、大変僭越ながら現在感じていることを少し書かせていただきます。

1. 効果的な対策の周知について

感染のメカニズムとして「現時点では、飛沫感染と接触感染の2つが考えられます。」という内容が、厚生労働省等のページやそれを引用する形で首相官邸のページにも記載されています。また、空気感染は理論上の可能性はあるものの、ほぼしないレベルとされています。よって、「目・鼻・口を、洗っていない手で触らない」「各行動の場面に対し、飛沫を浴びないための必要最小限の距離を取る」の2点のみをシンプルに周知する事で、感染の可能性をゼロに近づける事が出来るはずですが、この2点をわかりやすく注意喚起した情報が殆ど無いのが現状です。

これが現時点では最大の問題で、緊急に改善すべき事だと認識しています。現在各所で報道されている感染拡大も、上記2点が意識されていない、感染対策のピントがずれている事が原因と考えられ、対策の要点がシンプルに世の中に周知されることで、感染拡大を大幅に押さえることが期待されますが、多くは感染経路不明として人数のみを示し、あたかも空気感染しているかの様な不安を煽るだけの報道ばかりで、効果的なシンプルな対策をわかりやすく注意喚起するサイトや報道は殆どありません。

この原因として、専門家会議によって提言された「新しい生活様式」に、そのような最も大事な注意点が記載されておらず、最近「過剰・不要ではないか？」との指摘が各所でされている「距離確保」が必須事項の様に記載されている事が大きいのではと考えられます。

本来は、この提言の見直し、即ち過剰で不要な対策の是正から行っていただきたい所ですが、諸般の事情でそれが出来ないのであれば、先ずは私達が出来るところから、わかりやすく実行しやすい効果的な対策を運営ガイドライン等に反映し、注意喚起していく事が現実的だと考えます。実際に職場で工夫・使用した文面を下記に示します。

※工夫ポイントを赤で記載

ご来場の皆様へのお願い

- ご来館後に体調を崩されたと感じられた方は、鑑賞をお控えください。
- ご来館直後に、アルコール除菌より効果的な「石けんを用いた手洗い(20秒以上)」、および咳エチケットへのご協力をお願いいたします。
洗っていない状態の手での飲食行為や、目・口・鼻を触る事はお控え下さい。
- 接触感染防止のため、プログラム等をご自身でお取りいただく事、ご了承下さい。
また、会場内のドア・机・手すり・椅子など、可能な限り手を触れないようご注意ください。
- 飛沫感染防止のため、必要十分な人との間隔確保にご協力をお願いいたします。
特に、マスクをお持ちで無い方は「2m以上」の間隔確保をお願い致します。
館内での大声による発声、特に終演後「ブラーボ」の掛け声等をご遠慮ください。
- 万一の感染者発生に備え、アンケートの氏名・電話番号記入にご協力をお願い致します。
- ご鑑賞後の館外でも、引き続き感染防止にご注意いただき、日々健康にお過ごしいただく事をお祈り申し上げますと共に、次回のご来場、お待ちしております。

2. 劇場内の安全性周知について

過去に（劇場ではなく）小規模のライブハウスでのクラスター発生が報じられ、最近になって新宿の民間劇場でのクラスターが発生し、全国公文協からも速やかに見解が公表されました。その両方の発生状況を省みても、**感染の直接的な原因が、客席内での飛沫感染等ではなく、終演後のハイタッチでの接触感染、および食事会での飛沫感染である可能性が高いことが、報道や関係者の証言等から推察されます。**

前節で述べた「効果的な対策」と共に「マスク着用および発声の抑制」を併用する事で「**感染メカニズム上、劇場内での注意を遵守すれば感染は殆ど発生せず、ゼロに近づけられ、劇場内は安全である**」事を、その根拠と共に示すことが、現在得られている知見、および近々NHKで公開される検証実験などから、十分説明可能になりつつあると認識しています。

そして、マスクをして会話を控えれば、客席では満席でも感染のリスクは無い事が証明され、様々な公演内容に対し、「必要な距離を短くするための工夫」を考え、「公演内容別の必要最小距離」を整理していく事で、興業として十分に成り立つ運用が可能になると信じています。

3. ガイドライン改訂に際しての課題について

前節で述べた事は、当初不明であった多くの事柄が、様々な分野の専門家の方からのご指摘や提言によって、次第に改善される物と楽観視していましたが、予想に反していっこうに改善される機運が感じられないばかりか、すぐにも改善できるシンプルな要点をついた対策の整理が未だにアナウンスされず、不安を煽るばかりの報道と共に、効果の無い過剰な対策が見直されず、放置されたまま推進されている様にも見受けられます。

その理由の一つとして、これまで推進してきた「新しい生活様式」が見直されることによって、これまでの過剰な対策を行ってきたことに対する「責任問題」が生じる事を恐れている可能性があるのでは、と想像しています。

しかし、本当に取るべき責任は、日々次第に明らかになっていく検証結果等の知見を反映した改訂を行い、感染防止と日常生活の両立をより高いレベルで実現していく事である事は、多くの方々が既に認識されている事と存じます。

今後も「新しい生活様式」を初めとする各種ガイドラインが改訂されないのであれば、全国公文協の独自ガイドラインとして条件付きでも現実的な運用基準を定めていくことも、不本意ながら一つの方法ではないかと考えています。

以上、今後の改善のためのヒント・きっかけになれば幸いです。